

## エッセイ特集1

### 病気・医療・看護とヴィクトリア朝文化

#### 「正統医学」と「代替医療」の境界線

黒崎 周一

#### はじめに

この稿では、ヴィクトリア朝イギリスの代替医療について、これまでの研究の潮流を概観した上で、今後の課題を示す。現在、欧米や日本などで代替医療市場は年々拡大の一途を辿っているが、ヴィクトリア朝の人々にとっても、代替医療は必ずしも縁遠い存在ではなかった。特に18-19世紀転換期には、いくつかの代替医療が相次いで誕生し、ヴィクトリア期のイギリスに伝来している。

オーストリアの医師 A. メスマーが創始したメスマリズムは、体内の動物磁気の不均衡を病気の原因と定め、これを催眠術によって是正することを提唱した。この催眠術を施す集まりはイギリス各地で開催され、労働者階級から貴族まであらゆる階級の人々が参加したといわれる。しかし、男性医師が閉鎖的な空間で女性に催眠術を施すというスキャンダラスなイメージも相まって厳しい批判を招き、その支持者であった J. エリオットソンは、1838年にロンドンのユニヴァーシティ・カレッジの教授職を追われた (Winter 1998)。

水浴びや水浸しの布に包まるなどして病気を治療する水療法は、ドイツの V. プリースニツに端を発するが、イングランド中西部モルヴァーンに1842年に建てられたその療養施設には、C. ダーウィン、C. ディケンズ、A. テニスン、F. ナイティンゲールなどが滞在した。さらに同様の施設が各地に建設され、ピリヤード場やダンス・ホールなどを併設するヘルス・リゾートとして活況を呈していく (Adams 2015)。

またドイツの医師S. ハーネマンが提唱したホメオパシーは、薬品の希釈による薬効の向上と、ある病気に有効な薬品とは健康時にそれを服用してその病気と同じ症状を引き起こす薬品であるという類似の法則を主な原則として掲げ、医学界で激しい論争を引き起こした(Nicholls 1988)。さらに、キャドバリーを含むその支持者が1840年代に関税の引き下げで普及が拡大しつつあったココアを売り出す際に、「ホメオパシク・ココア」なる商品を販売しはじめると、フライ、ラウントリといったチョコレート製造業者もこれに追随し、少なくとも「ホメオパシー」という言葉は人口に膾炙していった。この他にも、薬草療法など様々な代替医療が人々の関心を集めていたのである。

医学史家R. ポーターはこれらの代替医療について、独自の医学理論や治療法を唱え、既存の医学を否定した点を特徴として挙げた。その態度は、ジョージ朝の「ニセ医者」が誕生して間もない消費社会で生き残るべく、したたかな事業家として従来の医学を模倣し、その権威を借用しながら様々な医薬品を販売した姿とは対照的であったという(Porter 1989)。代替医療の定義や呼称の問題には後でも触れるが、差し当たり本稿では、独特の医学理論や治療法を提唱し、正統医学から「詐欺」、「非科学」などと批判されて排斥の対象となったものを代替医療と呼ぶことにする。なおこの場合の「正統医学」とは、あくまで医師の多数派という意味で用いている。

構成としては、1で1980年代までの研究史を簡潔に概観した後、2から4で近年の研究を踏まえながら、今後の課題と展望について筆者の思うところを述べる。

## 1 対抗文化としての代替医療

代替医療はその台頭以来、それを顕彰することを意図した支持者の手によるものを除けば、医学史研究では長らく無視されるか、言及されても「インチキ」や「詐欺」などと批判されるのが常であった。医学が科学として発展する過程で淘汰されるべき存在、さらには法整備によって駆逐すべき社会的な害悪とみなされたのである。これは当初の医学史研究が、医師の手で医療教育の一環として進められたことに起因していると思われる。

しかし1960年代から70年代にかけて、主に2つの要因から代替医療の歴史に光が当てられはじめた。まず、現代医学への批判の高まりが見られた。社会学の分野を中心に、医師免許制度や教育制度の整備、つまり専門職化を医師による医療の独占とみなし、専門職支配とそれに伴う患者の軽視、そして医原病の蔓延を糾弾する動きが活発化したのである。これを受けて、その歴史的な経緯にも注意が向けられるようになった。医学の進歩が賞揚される陰で、19世紀以降にその舞台となった病院や実験室において、患者の個性を無視して病変や病原菌に医師の関心が集中し、医療空間から患者が消失していく過程が批判的に検討されたのである (Jewson 1976)。

さらに、歴史学における社会史研究の隆盛が医学史にも波及し、進歩史観に根ざした学問としての医学の発展史のみならず、社会的な営みとしての医療、たとえば地域社会での医療の実践について実証的な研究が進み、正規の医師以外にも民衆が活用できる医療サービスが多元的に存在したことが明らかになった。旅回りの治療師や骨接ぎ師などと並び、代替医療の担い手もまた、詐欺師、偽医者といった社会のアウトサイダーではなく、地域社会の医療サービスの一翼を担う存在として、その社会的役割を再評価されるようになったのである (Marland, 1987)。これら2つの潮流が交錯したところに、現在の代替医療史研究の出発点があるといえよう。

こうして1980年代になると、ヴィクトリア期の代替医療は、専門職化を推進する正統医学の対抗文化としての性格が強調されるようになる。この時期に、年齢、性別といった患者の特性を考慮して全身のバランスの中で疾病を捉える全体論から、疾病を人体の各組織、器官に局在する実体とみなす局在論への転換、すなわち「患者を診る医学」から「病気を診る医学」への変化が起り、患者に対する医師の権威が増大する中で、代替医療がこれに不満を持つ人々の受け皿になっていたというのである。これは、全体論的な疾病観を堅持して患者との対話を重視し、加えて自己治療を推奨するという、代替医療に共通する特徴が人々を引きつけたと考えられていた。加えて、当時は薬効を正確に把握できていないにも関わらず、複数の薬品を大量にかつ同時に用いる多剤投与が蔓延しており、これとは対照的な代替医療の「穏やかな」治療法が支持を集めたという声もある。もっとも多剤投与は、医師が一方的に推し進めたというよりも、むしろ患者の側

がそれを望んでいた側面があることに注意する必要がある。

しかし同時に、正統医学と代替医療を全く別個の相反する存在と捉える従来の見解は、この頃までに見直されつつあった。両者の境界線を自明のものではなく、社会的に構築されたものとみなしたのである。そこで度々言及されたのが、代替医療と当時の政治・宗教情勢との関連性である。普通選挙の実現を目指して夢破れたチャーティストなどの急進主義者や、未だに国教徒との地位格差に悩まされていた非国教徒が、患者との対話と自己治療に重きを置く代替医療に民主主義志向や反エリート主義志向を見出し、その支持者になる傾向があったとの指摘がなされた。つまり、医学の非主流派である代替医療が政治・宗教の非主流派と結びついたことで、正統医学と代替医療の境界線が社会的に可視化されたというわけである (Bynum and Porter 1987; Cooter 1988)。総じて、現代医学への批判的なまなざしを反映しながら、その対抗文化が社会的に構築される過程を解明することが、研究者の大きな関心事となっていた。

## 2 境界線をめぐるポリティクス

もっとも、対抗文化としての代替医療という見解は今も有力であるものの、近年ではこれを見直す向きもある。この傾向は、現代医学批判に規定されていた専門職化研究の再検討により拍車がかかっている。専門職としての医師の権威が確立されたかに見える 19 世紀末のイギリスでも、薬品や医療器具を扱う医療産業が拡大し、医療の商品化が進行していた。医学にも資本主義が浸透していたのであり、性的サービスをも含むマッサージ産業や、「電気治療」を謳うベルトやチェーンなどのあやしげな医療器具が、時に正規の医師を巻き込みながら販売・提供されていたのである (Ueyama 2010)。

このように、従来考えられていたより専門職化の影響が限定的であるならば、その対抗文化と位置づけられてきた代替医療の性格にも再検討の余地があろう。医療の商品化との関連でいうと、冒頭でも触れたように、水療法がツーリズムと結びつき多くの顧客を獲得していたが、最終的に水療法の施設は、治療の機能を喪失してリゾート施設へと変容していったとい

われる。医療の商品化は、正統医学と代替医療の境界線を曖昧にしたのである。また医学理論の面でも、水療法を支持する医師が実は正統医学の生理学や病理学を取り入れていて、疾病に対する認識は正統医学とさしたる違いはなかったと論じる研究がある (Bradley and Dupree 2002)。

そしてこのように曖昧なればこそ、境界線をめぐって様々な遣り取りが展開された。たとえばホメオパシーを支持する医師は、全国各地で篤志病院、学会、医学雑誌などの公的な議論の場から排除された。1851年には、地方内科・外科医協会(後のイギリス医師会)が会員に彼らとの職業上の一切の接触を禁じた。そうすることで両者の境界線を明確化しようとしたのである (Weatherall 1996)。しかしこうした取り組みに、どれほどの効果があったかは定かでない。排斥を受けたホメオパシーの支持者たちは、自分たちで次々と篤志病院を設立したが、その地域の有力者らは、貧困層への慈善医療に貢献してくれるのであれば、正統医学とホメオパシーの違いにさしたる関心を払わずに、それを支援することも珍しくなかったのである。

何より、自由放任が1つのイデオロギーとなっていたヴィクトリア朝社会にあって、代替医療の排斥に支持を集めることは、決して容易ではなかった。そもそもホメオパシーなどの代替医療は、非合法化されることもなかったのである。1858年に制定された医師法は、全国統一の医師免許制度を実現し、正規の医師のみに救貧法医務官などの公職に就く特権を認めたが、同時に特定の医学理論を支持しているという理由で医師免許を剥奪したり、交付を拒否したりすることを禁じていた。国家は医師に一定の保護を与えると同時に、自由競争の制限を極力避けたのである。さらに正統医学の中からも、排斥運動を疑問視する声が上がっていた。代替医療を否定するにせよ、自由に議論を交わそうとする、少なくともそうした姿勢を示すことが、「科学的」とみなされたのである (黒崎 2014)。こうした境界線をめぐる遣り取りは、ある時代や地域において「科学」と「非科学」・「疑似科学」がどのように区別され、それにより「科学」がどう定義されたかを考察する上で、今後も一層の研究が求められる問題である。

### 3 「代替医療」という呼称

ここまで見てきたように、正統医学と代替医療の境界線が曖昧となれば、「代替医療」という呼称や、「正統医学」との二項対立の構図自体が研究者の議論の的となるのは、自然の流れといえよう。「代替医療」は、字義通りに捉えると別の医学に取って代わるもの、もう1つの選択肢として存在するものということになるが、ヴィクトリア朝に限らず、ある時代、ある地域の人々にとって、それが文字通りの役割を果たしていたかどうかは甚だ心許ない。実際のところ、ヴィクトリア朝では「代替医療」という言葉は使われていない。これは正に、医学への不信が深まりを見せる現代の産物であり、本来、他の時代にむやみに適用することは慎まなければならない。それでは当時どのような呼称が用いられたかということ、そもそもメスメリズムや水療法、ホメオパシーの間には明確な連帯意識が見られず、当然それらの総称も必要とされていなかった。これに対し、正統医学は「偽医者」、「詐欺」などと並んで「異端」という呼称を度々使用した。それにより、翻って自分たちの正統性を強調しようとしたのである。この他にも「非正統」、「周縁」、「分派」など様々な呼称が研究史上で取りざたされてきたが、いずれも「正統」や「主流」の存在を前提としていることから、従来の二項対立の構図を補強する結果を招きかねないことは明らかである。もちろん、あらゆるバイアスから解放された概念など存在し得ないが、これらは、医学史研究が避けられない課題である (Bivins 2011)。

### 4 異文化医学

また、境界線や呼称を検討する際に考慮すべき大きな問題の1つに、異文化医学の存在がある。ヴィクトリア朝の人々にとっては、鍼灸や植民地の伝統医療などがこれに該当する。特に鍼灸は、17世紀に日本からヨーロッパに伝わり、19世紀のイギリスで流行廃りがありつつも一定の支持を集めていた。これも代替医療に分類されているが、日本や中国ではむしろ正統医学の座にあり、西洋の正統医学批判を意図して創始されたはずもなく、イギリスでも「インチキ」などの批判を浴びることは少なかったため、ホメ

オパシーなどとは立場を異にしている。

ただしイギリスでは、治療に針を用いるという点だけが受容され、「気」や「ツボ」といった独自の概念は捨象されており、西洋、イギリスの医師による日中の医学理論の蔑視、すなわちサイードのいうオリエンタリズムが医学にも見られたことが論じられている (Bivins, 2007, 2011)。これは、西洋医学のインドをはじめとした植民地への導入時の、現地社会の伝統医療との遭遇においても議論されている (Biswamoy and Harrison 2001)。もちろん、単にサイードの議論を適用するだけでは、「西洋」と「東洋」という別の二項対立の構図に陥る結果を招くので、これを批判的に検討しながら、西洋医学と様々な異文化医学との相互影響の可能性を考察する必要がある。そうすれば、普遍的なものと思われがちな西洋医学・科学の成り立ちについて、また新たな知見を得られるのではないだろうか。

## おわりに

以上、ヴィクトリア期の代替医療に関する研究史と筆者の考える課題を示した。もちろん、ここで触れた内容、紹介した研究は非常に限定的である。今回取り上げたのは、多様な代替医療のほんの一部に過ぎないし、19-20世紀転換期に医師たちが「インチキ」と糾弾し、活発な反対運動を展開したホロウェイやビーチャムなどの「特許薬」には触れられなかった。これは医療の商品化という文脈で取り上げられる問題だが、正統医学と代替医療の境界線が曖昧であるように、代替医療と「特許薬」のそれもまた曖昧なのであり、両者の関係性は今後明らかにされるべきである。また「特許薬」を販売していた薬剤師のような医師以外の医療職にも注意を払う必要がある。いずれにせよ医学史研究では、代替医療、あるいは異文化医学を周縁的なエピソードとして扱うのではなく、それも包括した叙述の仕方を今後も模索し続けなければならない。

## 参考文献

Adams, J. M., *Healing with Water: English Spas and the Water Cure, 1840-1960*,

- Manchester: Manchester University Press, 2015.
- Biswamoy, P. and Harrison, M. (eds), *Health, Medicine and Empire: Perspectives on Colonial India*, New Delhi: Orient Longman, 2001.
- Bivins, R., *Alternative Medicine?: A History*, Oxford: Oxford University Press, 2007.
- Bivins, R., 'Histories of Heterodoxy', in M. Jackson (ed.), *The Oxford Handbook of the History of Medicine*, Oxford: Oxford University Press, 2011, pp. 578-597.
- Bynum, W. F. & Porter, R. (eds), *Medical Fringe & Medical Orthodoxy 1750-1850*, London: Croom Helm, 1987.
- Cooter, R. (ed.), *Studies in the History of Alternative Medicine*, London: Macmillan Press, 1988.
- Bradley, J. & Dupree, M., 'A Shadow of Orthodoxy? An Epistemology of British Hydrotherapy, 1840-1858', *Medical History*, vol. 47, no. 2, 2003, pp. 173-194.
- Jewson, N. D., 'The Disappearance of the Sick-Man from Medical Cosmology, 1770-1870', *Sociology*, vol. 10, 1976, pp. 225-244.
- Marland, H., *Medicine and Society in Wakefield and Huddersfield 1780-1870*, Cambridge: Cambridge University Press, 1987.
- Nicholls, P. A., *Homoeopathy and the Medical Professions*, London & New York: Croom Helm, 1988.
- Porter, R., *Health for Sale: Quackery in England 1660-1850*, Manchester: Manchester University Press, 1989. (田中京子訳『健康売ります—イギリスのニセ医者の話 1660-1850—』みすず書房、1993年。)
- Ueyama Takahiro, *Health in the Marketplace: Professionalism, Therapeutic Desires, and Medical Commodification in Late-Victorian London*, Palo Alto, California: The Society for the Promotion of Science and Scholarship, 2010.
- Weatherall, M. W., 'Making Medicine Scientific: Empiricism, Rationality, and Quackery in Mid-Victorian Britain', *Social History of Medicine*, vol. 9, no. 2, 1996, pp. 175-194.
- Winter, A., *Mesmerized: Powers of Mind in Victorian Britain*, Chicago: Chicago University Press, 1998.
- 黒崎周一「医学における『正統』と『異端』—ヴィクトリア朝イギリスのホメオパシーを事例として—」『西洋史学』第254号、2014年、130-140頁。  
—明治大学兼任講師